

旭山動物園マイスターボランティア ボランティアスタッフ募集について

旭山動物園は、単に多くの観光客をもたらしてくれるだけではなく、この地域に未来のすばらしい可能性をもたらしてくれるのです。でもその可能性は、わたしたちひとりひとりが積極的に活動してはじめて開花するのです。

だから、ひとりでも多くの地域の人々の参画で、旭山動物園という場所から地域全体の明るい未来のために、そして次代を担う子どもたちのために、ともに活動していきましょう。

旭山動物園マイスターボランティア

旭山動物園マイスターボランティア事務局

〒070-0043

旭川市常盤通1丁目道北経済センタービル5階

社団法人旭川青年会議所内

TEL0166-22-9815 FAX0166-26-3235

ホームページアドレス <http://www.asahikawa-jc.or.jp>

Eメールアドレス room@asahikawa-jc.or.jp

旭山動物園のあゆみ

～旭山動物園の開園～旭山動物園は、1951年(昭和26年)札幌円山動物園の開園、1963年(昭和38年)おびひろ動物園の開園に引き続き、北海道3番目の動物園として1967年(昭和42年)7月1日に開園しました。それまで動物園は大都市にしかありませんでしたが、1950年後半から60年前半の第1次高度成長期にかけて全国の地方都市でも動物園がつくられるようになりました。そのような全国的な流れの中で旭川市においても、動物園建設の声が高まりをみました。当時旭川市が行ったアンケートで、市民が一番欲しい施設は「動物園」でした。しかし、建設費だけではなく、開園後も多額の維持費を必要とする動物園の建設は容易ではありませんでした。市議会においても激しい議論が行われ、ようやく開園へ向けての予算がつけられました。当初計画の総事業費は約2億8千万円だったそうです。そして市民が待ちわびた開園日には約9千人を超える来園者で賑わったそうです。

～順調な経営～開園した1967年度(昭和42年度)の入園者数は、45万8208人でした。動物園の運営は、入園者数が人口と同じ程度あればよしとされているそうですから、当時の旭川市の人口が30万弱でしたから、旭山動物園は大成功であったと言えます。その後も、40万人以上の入園者数を維持し、1978年度(昭和53年度)にはついに50万人を突破しました。さらに、1983年度(昭和58年度)には、ジェットスクリーコースターとツインドラゴンの大型遊具を導入した結果、入園者数は59万7133人を記録し、この記録は2001年度(平成13年度)までの18年の間、旭山動物園の最大入園者数となっていました。

～冬の時代～しかし、大型遊具による入園者数の増加は一過性のものでしかありません。1983年(昭和58年)度をピークとして入園者数は徐々に減少し、景気減退の影響もあったのかもしれませんが、1992年度(平成4年度)には入園者数が急激に減少し、35万9316人となりついに40万人を割り込みました。そのような中で、当時年間4億円程の維持費がかかり、赤字経営の動物園は旭川市の「お荷物」とまで言われました。動物園はもともと収益性を期待されるものではなく、市民の安らぎの場、教育の場、種の保全や研究の場である等、金銭的に評価できない重要な役割をもっていますが、市の財政状況からするとこのような考え方も受け入れられない状況であったようです。動物園の予算は削減され、売却話まで出るような状況でした。入園者数増加には、既存の施設の更新や新しい取り組みが不可欠でありましたが、予算化されるどころか、予算が削減されるような状況の中で、当時のスタッフの苦労は並大抵のものでなかったものと思います。

～回復に向けて～このような大変厳しい状況の中にあっても、動物園のスタッフは「お金をかけないでもできることはないか。もし、お金があったらどのような施設にしようか。」と考え続け、毎晩のように夢を語りあい、夢をスケッチに描きました。これがテレビのドキュメント番組でも有名になった「14枚のスケッチ」です。動物園スタッフが描いた夢は、現在の菅原市長が1997年に新市長として就任したことを契機として一歩ずつ実現の方向に向かいます。菅原市長は就任当時、市民が楽しめる施設の必要性を強く感じていたこともあり、動物園のスタッフの構想に感銘と理解を示し、開園30周年という巡り合わせも重なり、新施設に向けた予算がつけられました。

～奇跡の再生～1997年(平成9年)4月に「こども牧場」がオープン、同年9月には「とりの村」がオープンし、入園者数も4年ぶりに30万人台に回復しました。その後も、旭山動物園再整備事業として、平成10年9月に「もうじゅう館」(入園者数35万2287人)、1999年(平成11年)7月に「さる山」(入園者数39万5217人)が立て続けにオープンし、「ペンギン館」がオープンした2000年度(平成12年)度には53万9888人の入園者数を記録しました。そして、2001年(平成13年)8月に「オランウータン空中運動場」(入園者数57万5884人)がオープンし入園者数も大幅に増加していきました。それ以降も、2002年(平成14年)

9月にほつきよくま館(入園者数67万431人)、2003年(平成16年)6月にあざらし館のオープンにより、入園者数は記録的増加を続け、2003年度(平成16年度)7月の月間入園者数18万5461人、翌月8月の月間入園者数32万1500人は、上野動物園を抜き、全国1位を記録したことは、記憶に新しく、旭山動物園の名前を全国に響かせることになりました。2004年度(平成16年度)の入園者数は、144万9474人となり、全国の公立動物園68園中、3位となりました。そして2005年度は200万人を突破し、2006年度は、前年度より100万人も多い300万人を超える入園者数を記録しました。閉園の危機を迎えていた頃の最低入園者数26万822人と比べると、まさに「奇跡」と呼ぶべきでしょう。

これからの旭山動物園を考える

動物園の果たすべき役割としては、「レクリエーションの場」・「教育の場」・「自然保護の場」・「調査・研究の場」の4つが挙げられます。現在の旭山動物園における大勢の観光客の入園(観光客の旭川への集客)は、厳しい状況が続いている地域経済にとって、非常に喜ばしいことです。しかしながら、この状況は動物園が本来の役割を果たすことを困難にしている側面があり、事実マイカーによる来場者、すなわち市内および近郊からの来場者の減少傾向を生じさせ、このような状況は大変危惧されています。多いに注目を集め、全国各地、さらには海外からも多くの来場者が訪れることは喜ばしいことに変わりはありません。ただこの状況に満足してばかりいてはいけなさと考えます。様々な障害を乗り越え、素晴らしい施設として確立されつつある「旭山動物園」を、次代を担う子どもたちへ、地域の「宝」として未来へ、伝えていけるよう取り組んでいきたいと考えています。そのためには単なる観光のための施設としての「動物園」ではなく、本来の施設の役割を十分に果たすことが出来るような動物園運営を目指し、市民・近隣住民、行政、教育機関、地域産業界が連携を図り積極的に取り組んだならば、現在の状況が一過性のブームとなって、かつての苦い経験を繰り返すことは決してないと考えられます。

旭山動物園マイスターボランティアとは

旭山動物園マイスターボランティアは、2005年11月社団法人旭川青年会議所が開催したシンポジウムにおいて提唱された市民の直接的な参画によって新しい動物園の運営をおこない、新しい「まちづくり」のかたちを実現しようとするものです。全国の脚光を浴び、まさしく日本を代表する施設として遠く海外からも大勢の観光客が訪れるまでになり、市民共通の関心事にもなった旭山動物園は、一見すれば成功事例としての側面ばかりが目につきます。しかしかつては、来園者数が減少の一途をたどり、閉園の危機に直面していたのです。その危機を乗り越え、年間160万人以上の来園者であふれかえるまでに動物園を変えたのは、ほかならぬ動物園職員の旭山動物園存続に向けた寝食を忘れた取組と、それを支え続けた市民の存在でした。その動物園が今、急激な入場者数の増加に伴う新たな問題を抱えています。この問題の解決に対して、市民・近隣住民、行政、教育機関、地域産業界が連携を図り積極的に取り組んでいきたいと思ひます。地域住民一人一人が積極的に行動を起すことで、現在動物園の抱える諸問題の解決を図り、さらにはその先に住民参画型社会の実現へとつなげていきたいと考えます。

ここでは単にボランティアスタッフとして人的な支援を目的とするのではなく、スタッフひとりひとり主体的に運営に携わり市民参画型の新たな「まちづくり」を進めることを目的としています。だからといって難しく考えていただく必要はありません。「自分の住むまちがもっと良くなるような活動してみたい・・・」、「社会のために何かしてみたい・・・」という方は是非とも参加して、新たな「出会い」、そして「やりがい」や「生きがい」を見つけて頂きたいと思ひます。

ドーセントを柱としたボランティア活動

現在日本各地の動物園、博物館、科学館などでは、ドーセントと呼ばれるボランティアが積極的に取り入れられています。ドーセントとは、動物園において動物の生態・飼育の解説、あるいは美術館や博物館での鑑賞指導について、特定の訓練を受けたガイドのことです。ドーセントの意義に関しては以下のように述べる事が出来ます。

ドーセントは、それぞれの施設の来場者に適した展示品や対象を選択してツアーの内容を構成し、ガイドを行います。このような活動は来場者に対して施設が提供する「教育」という役割を明確にするだけでなく、ドーセントとして活動する人にとって、コミュニケーション能力、とくに面白くしかも有意義な情報を伝える能力が備わるなどの効果的な学習体験の場となります。人々が独自な形で学習し、自らの体験を積み上げていくといった生涯学習の場として大変有効だと言えます。ドーセントの導入は来場者に対して展示内容を十分に伝えることを可能にし、施設の役割達成に非常に有効な手法であると考えます。

全国の様々な施設で導入されているドーセントを旭山動物園の抱える課題の解決と結びつけ、さらに旭山動物園ならではの独自性をもった魅力ある運営を図ろうとするのが、旭山動物園マイスターボランティアです。

活動内容は

この制度では皆さんにボランティアスタッフとして登録していただきます。ボランティアスタッフに登録をされた方は、自分の都合のつく時間を活用して、無理なく自分のペースで活動を行っていただきます。動物園内の施設案内や来園者に対する観光情報の提供やイベントの企画・運営等を行っていきます。ボランティア活動が始めての方でも、問題はありません。自分のできることから、自分の時間の都合に合わせて活動に参加することが可能です。

活動のカテゴリーについて

主な活動はスポットガイドボランティアとインフォメーションボランティアとイベント企画ボランティアの3つに分類されます。実行委員会が実施するオリエンテーションや勉強会を経て、それぞれのボランティアスタッフとして活動を開始します。その後は、各種ボランティア活動を行いながら、講習会や勉強会を経て動物マイスターやインフォメーションマイスターなどへのステップアップできる仕組みづくりを行っていきます。

「**スポットガイドボランティア**」は、特定の園内施設において、その施設内全般での補助と今まで習得した知識をもとにスポットガイドを目指していきます。

「**インフォメーションボランティア**」は、動物園内の案内はもちろんのこと、市内な旭川近郊の観光情報や観光スポットについての情報提供を行います。できれば海外からの来場者へ対する外国語インフォメーションの充実も図っていければと考えます。そしてせっかく全国各地からこられる方々にもっと旭川をはじめ、近隣の素晴らしさを伝えていくための情報の受発信を行おうと考えています。

「**イベント企画ボランティア**」は特に、旭山動物園で行われるさまざまなイベントの補助と独自のイベントを企画していきます。動物園の役割における「教育の場」、「レクリエーションの場」としての動物園の役割を今一度市民や近隣住民へ発信していきたいと考えます。

「動物マイスター講習」とは、この会の特徴的な運営として位置づける専門的な知識を身につけることができる講習会です。動物園のスタッフを講師として、動物園やそれぞれの動物たちの生態や特徴を学ぶことで知識を習得していきます。また、我われ独自で勉強会などの講習会も開催していきたいと思えます。将来的には、そこで得た知識をもとにガイドとして実践をつみながら、試験、認定を経てマイスターの称号も取得可能になるよう準備を行います。ただし、マイスター講習の受講は、ボランティアスタッフに限らせていただきます。

事例紹介

ドーセント

アメリカではドーセント(Docent)と呼ばれる一般市民からのボランティアが協力・参加しています。ドーセントとは、例えば動物の生態・飼育の解説、あるいは美術館での鑑賞指導について特定の訓練を受けたガイドのことです。無報酬ながら生涯学習の場として、さらには地域社会への貢献の場として非常に人気があり、中には数ヶ月から数年の間待たされるケースもあります。余談ですが、就職の際にもドーセントの活動実績が考慮される側面もあると聞きます、それほど一般に広く知れ渡っているということです。

アメリカのボルチモア博物館の例

アメリカのボルチモア産業博物館(The Baltimore Museum of Industry)では「ドーセント(docent)」というボランティアの展示解説員によるガイド・ツアーが人気を集めていた。牡蠣の缶詰工場に勤めていた人や鍛冶屋、船乗りなど、彼らの経歴は様々で、その人がどのような経験を積んできたかによって異なる、個性豊かなストーリーに沿って、ボルチモア市における産業の変遷を示す展示の紹介が行われる。

同館のスタッフによると、お気に入りのドーセントが解説する時に合わせて来館する人や、敢えて違うドーセントを選び、毎回オリジナリティーあふれる展示解説を楽しむ人もいるという。解説するスタッフによって展示物から汲み取るメッセージは異なり、その都度、展示物に潜む新たな側面が観覧者の前に表れる。人による展示解説は、その館の展示の一部であり、館を構成する魅力の一つに感じられた。このように、人によるフェース・トゥー・フェースのコミュニケーションを生かした解説は、観覧者の興味を喚起する上で、極めて有効な手法である。展示資料と展示技術に、人を介した展示解説が加わることによって、より魅力的な展示空間が形成される。

博物館の展示室を舞台に、思い出深い「人」との出会いが、これからも数多く生まれることを期待したい。

住民参画型で閉園を免れた到津動物園

北九州市には、閉園の危機を住民の手によって免れた動物園があります。今から7年前、到津遊園は西鉄が運営・管理していました。バブル崩壊とともに企業がリゾート事業から撤退を余儀なくされて時代でした。到津遊園を開園したのが約70年間前、その間永く市民に愛され続けた施設でしたが、平成10年4月21日、到津遊園も11年春を目途に閉園すると発表しました。しかしながら、地元市民の手によって5月11日、閉園しないように西鉄への申し入れをしたのです。

最初に働きかけたのが、自治会総連合会の方たちでした。何故自治連会の方たちなのかと言うと、その会に属している年齢層が年配の方ということと、親子三代にわたって共に到津遊園に足を運んだ思い出の場所だった事がきっかけだったらしいとのこと。また、このような施設が北九州市に無く、北九州市の中心に到津が在り300年前の原始林がこの到津の森公園にあったからだと言うこと（到津の森公園園長談）。その後、市民アンケートや署名活動を行い26万人から存続の意を寄せられました。平成14年4月13日の開園を迎えるまでに外郭団体や市民の手によって作られた動物園であります。

現状は開園準備から携わってきた市民ボランティアの(森の仲間たち)や財団法人・外郭団体の方たちが日夜ソフトの整備にウエイトを置いて(花を植えたり、動物のお世話、お客様にサービスを提供するなど)住民参画型施設に変貌を遂げています。

到津の森公園には、市の職員が3名しか居なく後のスタッフは皆外郭団体や市民ボランティアで運営されている市民から愛された施設との事でした。又、入園料が800円で日本で2番目に高いそうです、なぜ入園料が高いかと言うと、半分の400円が動物の餌代になるとの事でした、又その説明もしているそうです。そうする事によって、少しでも動物園に関わりを持ってもらおうということでした。

最近北海道で閉館になった水族館のはなし

～ フォーラムの小菅園長のはなしから ～

小菅園長の主張

広尾水族館は、平成17年の11月に閉鎖が決定しました。同年11月3日に行われたマイスター制度に関するシンポジウム開催日と期せずして同日となってしまいました。理由は「不採算部門として地域住民の税金をこれ以上充当することは、自治体として容認するものでない」というものです。シンポジウムの中で小菅園長は「企業や自治体の経営では、今後このような事態が発生していく時代に突入するであろう。だからこそ地域住民の支えによる経営が必要とされる。」と唱えました。また「切迫した財政の中で、来園者の増加が見込めるような運営計画も確立しにくいのも現状である。閉鎖に至る前に何か地域住民の参加によって、違った結果は無かったのか。それが悔やまれる。」と偽らざる心底を吐露しました。このように全国各所に存在する、これらの施設は非常にもろいものであり、地域の住民の支えなくては存続し得ないのです。だからこそ地域の力を結集し、広尾の例に学び同じ徹を踏まないことが求められているのです。